

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 河原 弥生

本論文は、17-19世紀の中央アジア、とりわけフェルガナ盆地において、預言者ムハンマドの家系や16世紀ナクシュバンディー教団の導師マフドゥーム・アアザムの血縁という、聖なる出自を主張したマフドゥームザーダという「聖裔」集団が、新興のコーカンド・ハーン政権とどのような関係を結び、フェルガナの地域社会においてどのような役割を果たしたのかを検討したものである。マフドゥームザーダについては、これまで東トルキスタン（現在の中国新疆）やサマルカンドにおける活動が知られているが、両地域の間位置するフェルガナ地方の事例は未知であり、この地に成立したコーカンド・ハーン国の歴史も研究は立ち後れていた。本論文は、著者が自ら現地で収集した新しい史料を中心にすえて、マフドゥームザーダがフェルガナ地方に浸透してその勢力を扶植する過程をコーカンド・ハーン国の盛衰と関連づけながら考察することを目的としている。

本論文は二部構成の本文5章と補論、未公刊史料を収めた別冊付録からなる。第1部では中央アジアにおけるマフドゥームザーダの成立と活動を概観し（第1章）、ついで18世紀前半にフェルガナ盆地とその周辺で活動したホージャ・ハサンというマフドゥームザーダの伝記を分析する（第2章）。第2部では不明な点の多いコーカンド・ハーン国成立史を主に文書史料を利用して再検討し、先行研究を批判、修正した（第3章）後、コーカンド・ハーン国の政権において重要な役割を果たしたマフドゥームザーダ（第4章）とマルギランという一地方に確固たる基盤を築き、地域社会において指導的な役割を演じたマフドゥームザーダの一族を詳細に検討している（第5章）。補論は17世紀初頭ムガル朝期のインドに生まれたナクシュバンディー教団の改革派、ムジャッディディーヤとマフドゥームザーダとの相互関係を分析し、別冊付録（268頁）には著者がフェルガナ盆地での現地調査で収集したマフドゥームザーダ関係の多数の文書史料を収めている。

本論文は、ソ連解体後によりやく本格的な研究が可能となった中央アジア史研究の新展開を体現している。既知の年代記や文書史料に満足することなく、現地調査によって民間所蔵の多数の文書史料と口頭伝承を発掘、収集した著者は、世襲的な聖裔集団マフドゥームザーダの実態とコーカンド・ハーン国の成立史に多くの新知見をもたらし、バルトリドやベイセンビエフらの定説を正すことに成功している。17世紀末から中央アジアに浸透したムジャッディディーヤとの関係も興味深い。聖者伝などの史料に密着した結果、史料の持つイデオロギーに引きずられた箇所がみられること、史料の性格もあってマフドゥームザーダの系譜関係に分析が偏ったことなど、今後に残された課題もあるが、本論文は全体として中央アジア史研究の新しい潮流を示す労作と評価することができる。よって、本審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいとの結論に達した。